連載

教えて！先生 日本人形の衣裳に迫る

第3回 女房装束

日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。業界のスペシャリストを講師に迎え、衣裳の基礎から応用まで教えていただきます。知識の習得や再確認、セールストークにお役立てください！第3回は「女房装束」です。今回も引き続き、松井幸生さんに教えていただきます。

今月の先生

松井幸生さん
株式会社誉勘商店社長
Matsui Yukio

金襴織物・裂地の製造卸商を営む。誉田屋勘兵衛から数えて13代目。京人形商工業協同組合副理事長。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。

女性の装束

五衣唐衣裳

五衣唐衣裳は「いつつぎぬからぎぬも」と読み、十二単は俗称。

平安時代においては宮中女子の標準服だったが、現在では御即位の大礼の儀や御成婚などの宮中の儀式でのみ、皇室・皇族がお召しになる。

十二単が誕生したのは十世紀頃（平安時代中期）と言われている。ただ当時の装束については記録が少ないことから、室町時代末期頃には誕生当初と異なるものになっていたという。

江戸時代後期の装束「御再興（ごさいこう）」により平安時代に近い形に戻された。御即位の大礼の儀、皇族妃の御成婚に見る十二単の姿はこのスタイルが基となっている。

フォーマルファッション

五衣唐衣裳

——第3回は女房装束です。前回までの有職の色は大変勉強になりました。色や柄によって着る場面が異なったり、年齢で違ったりとても興味深いです。今回のテーマである〝女房装束〟もきっと奥が深いと思いますので、節句人形初心者の私が率直に感じる疑問を受け止めていただければと思います。よろしくお願いいたします。

松井さん　女房装束ですね。いろいろと資料をお読みになっていると思いますが、いかがでしたか？

——女性の装束にもTPOがあることや、いろいろな衣服を重ねて構成されていることが分かりました。現代でいうレイヤードスタイルで、いわゆる重ね着ファッションですよね。温度調整ができるので私も好んで重ね着をしていたので、なんだか親近感があります。

松井さん　十二単に親近感があるなんて表現は初めてです。疑問に思われたのはどんなことですか？

——まずTPOがあるということに驚きました。どんなスタイルがあるのか知りたいです。

松井さん　女性の装束にもTPOはあります。令和の即位礼正殿の儀に臨まれた皇后雅子様がお召しになっていたのが「五衣唐衣裳」です。一番上の唐衣は白と萌葱（もえぎ）色。その下の薄紫色の表着には皇后様のお印である「ハマナス」の紋が入っていました。このとき天皇陛下がお召しになっていたのが、連載初回でテーマにした黄櫨染御袍です。種類は次のように示すことができます。

物具装束（もののぐしょうぞく）　唐衣・裳・表着・打衣・袿・単・内袴・襪に裙帯（くたい）をつけて比礼（ひれ）をかけた平安時代のスタイルです。十二単よりもフォーマルで、厳儀の際に公家女房が着用。髪型は大垂髪ではなく、垂らした後、頭頂部の一部分を結い上げ宝冠をつけます。

五衣唐衣裳（いつつぎぬからぎぬも）

先ほど説明した通り、御即位の大礼の儀や皇族妃の御成婚に用いられる正装。五衣・唐衣・裳から構成されます。男子でいう御束帯に相当します。平安時代は垂髪で作り眉でした。

五衣小袿長袴（いつつぎぬこうちぎながばかま）　準礼装で五衣唐衣裳の裳をはずし、唐衣の代わりに小袿を羽織ったものです。居所などでくつろぐ際の服装です。このスタイルも平安時代は垂髪でした。

小袿長袴（こうちぎながばかま）　五衣小袿長袴から打衣と表着をとったスタイルです。

袿袴（けいこ）　普段着で、男子の狩衣や小直衣に相当。明治以降は儀式服として用いられました。

女児の装束には次があります。皇女が深曽木の儀で着る「**袙**（あこめ）」と、誕生のときから産着に限らず3～4歳まで男女ともに身に付けていた「産着の**細長**（ほそなが）」、そして成人の十二単に相当する晴れの装束である「**汗衫**（かざみ）」があります。

――いろいろと衣服の名称が出てきましたね。下に画像を用いて説明します。構成については第4回で詳しくお聞きしたいと思います。しかし女雛の衣裳もこんなに枚数を着せるのは大変ですね。

松井さん　雛人形の女雛の衣裳も、人間と同じ数だけ着ていると思っているのですね。分からなくもないですが、それは違います。お人形は観賞用ですから、省略している部分も多々あります。

――重ねているように見えるほど精巧に作られていたのですね。

松井さん　女房装束の構成については話が長くなるので次回にしますが、少しだけご説明しましょう。

五衣は何十枚も重ねた袿を指します。重ねる枚数は身分や、季節、儀式によって異なりさまざまでした。平安時代の歴史物語『栄花物語』には20枚も重ねたという話が記されていますが、5枚がスタンダードになり五衣と呼ばれるようになりました。

五衣に使われた色目を「襲（かさね）の色目」といいます。いろいろな色目があり、どれも色鮮やかでセンスのよい美しさを感じさせます。

――これまで教えていただいた有職の色がたくさん登場しそうですね。ところで女房装束の「女房」って何のことですか？

松井さん　今さらですか??

幸生（ゆきお）のワンポイントアドバイス

女房とは宮中の雑事を行う**女官**のこと。**皇后**や公卿の姫君に**仕える侍女**を指した総称。

※説明のため檜扇（ひおうぎ）を外した状態で撮影

①大垂髪（おすべらかし）
②唐衣（からぎぬ）
③表着（うわぎ）
④打衣（うちぎぬ）
⑤五衣（いつつぎぬ）
⑥単（ひとえ）
⑦長袴（ながばかま）
⑧大腰（おおごし）
⑨裳（も）

撮影協力／株式会社吉徳

参考文献

・仙石宗久著『十二単のはなし――現代の皇室の装い』㈱オクターブ、1995年）
・井筒雅風著『原色日本服飾史』（光琳社出版㈱、1982年）
・八條忠基著『素晴らしい装束の世界』㈱誠文堂新光社、2005年）
・八條忠基著『平安文様素材CD－ROM』㈱マール社、2009年）

※本連載は隔月連載です。第4回は2022年6月号に掲載します